

尤侗『擬明史樂府』譯注（六）

福本雅一監修・尤侗研究會譯注

凡例

- 一、底本は、『叢書集成續編』所收の『明史樂府』一卷（光緒二一年・宋澤元校刊本・懺花庵）に基づいた。
- 二、譯注は、解題・尤珍注・資料・詩・語釋・通釋の順で並ぶ。
- 三、尤珍注に對する語釋は（ ）内に記した。
- 四、換韻位置は、訓讀の下に」で示した。

21 作佳傳

靖難の殉臣、周是修（しゅうぜしゅう）（一三五四—一四〇二）を歌う。詩題の「作佳傳」は、三楊の一人楊士奇（一三六五—一四四四）が周是修の立派な傳（佳傳）を著したことをいう。

周是修、名は徳、字の是修が世に通行した。江西泰和の人。洪武末年に明經に擧げられ、霍邱訓導・周府紀善・衡府紀

善を歴任し、翰林院で『太祖實錄』の纂修に加わった。燕王（永樂帝）の軍が長江を渡り、南京の金川門に到ると、周是修は解縉・楊士奇・胡靖（22「兩狀元」參照）等に別れを告げ、日暮に應天府尊經閣に入りて自縊し、節義に殉じた。建文四年（一四〇二）六月一六日、年四九。著書に『薊薨集』六卷がある。傳は、『明史』卷一四三。

當初、解縉・楊士奇・周是修・胡靖・金幼孜・黃淮・胡儼等は、共に國難に殉じることを約束していたが、周是修以外はその約に負いて燕王に降った。後に、周是修の傳を作った楊士奇は、周輅（是修の子）に對して、「當時、我も亦た同に死せば、誰か爾の父の爲に傳を作らん」（『革除遺事』卷四）と述べ、聞かざる者の失笑を買ったという。

周是修の傳は楊士奇の「周是修傳」以外にも、解縉の「周

是修墓誌銘」や胡靖の著した「周是修傳」（佚）等もあった。しかし、本詩が「佳傳」と稱する楊士奇「周是修傳」は記述が詳細である上に、他の傳では觸れられていない周是修の殉節についても言及している。この間の事情について、『四庫提要』は以下のようにまとめる。「末に解縉の作る所の誌銘及び楊士奇の作る所の傳を附す、誌銘は但だ京師に歸りて紀善と爲り、翰林の纂修に預りて以て死すとのみ稱し、竟に其の殉節を言わず、傳は乃ち其の應天府學に自經するを言う、蓋し縉の誌を作るは永樂九年（一四二一）に在り、時に黨禁方に嚴なり、故に其の事を諱む、士奇の傳を作るは則ち宣德四年（一四二九）に在り、時に公論稍く明なり、故に其の實を著わす也」『四庫提要』卷一七〇・芻蕘集。周是修のような建文忠臣に關する傳や墓誌銘等は、永樂帝在世中にはとりあげ難く、宣德以後ようやく大きな忌避無く作られるようになった。この世相の推移故に、楊士奇は周是修の「佳傳」を公にすることが出来たというのである。

「尤珍注」

紀善周是修 楊士奇・解縉・胡靖等と共に死せんと約す、後に皆な約に負く、縉 靖の動靜を覘うかがわ使む、方に厠に入る、

尤侗『擬明史樂府』譯注（六）（福本・尤侗研究会）

回りて家人に問う、曾て猪に飼するや否や（ブタにエサをやったか）と、縉笑いて曰く、一猪すら向あお肯て捨てず、豈に肯て性命を捨てんやと、士奇 是修が爲なに傳を作る、其の子に語りて曰く、當時 吾若もし同に死せば、誰か爾なんじが翁を傳うる者ぞと、

「資料」

『明史』卷一四三・周是修傳、同卷一四八・楊士奇傳、『明史紀事本末』卷一八・壬午殉難、明楊士奇「周是修傳」（『東里文集』卷二三所收）、明解縉「周是修墓誌銘」（周是修『芻蕘集』卷六附）、明黃佐『革除遺事』卷四・周是修傳、明鄭曉『建文遜國臣記』卷五・周是修傳、明李贄『續藏書』卷六・周是修傳、萬斯同『明史稿』卷一八六・周是修傳、清傅維麟『明書』卷一〇四・周是修傳、清錢謙益『列朝詩集小傳』甲集・周紀善是修

作佳傳

入學宮	辭孔子	學宮に入り	孔子に辭し
衣帶題詩自經死		衣帶 詩を題し	自經して死す
出史局	別同官	史局を出で	同官に別れ

中國詩文論叢 第二十六集

官方飼猪不暇看 官方に猪を飼うも 看るに暇あらず」
 一死一生交情見 一死一生 交情^{あら}見わる
 留與若翁作佳傳 若^{なまじ}が翁に留與して 佳傳を作る」

學宮 府學・縣學のこと。孔子が祀られていた。ここでは、

應天府學（現在の南京夫子廟）をさす。

なお、周是修が自經したここ應天府學には、萬曆三年（一五七五）に周是修を祀る祠が建てられた。李贄『續藏書』には、「府學、今祠有りて、公（周是修）を祀る」とある。

孔子 ここでは應天府學の廟に祀られている孔子像を指す。

衣帶題詩 衣帶は衣の帶。題詩は、詩を書きつけること。周

是修が死に際して辭世の句を帶に記したことをいう。辭世の句の全文を見ることはできないが、『明書』には、「自ら其の衣帶に銘す、略に曰く、藩國に在らば、藩國に負かざらんと欲し、朝廷に在らば、朝廷に負かざらんと欲す、先哲の淳風を繼ぎ、後來の正覺を開かんと欲す、十餘年を越ゆるも、言は皆な行なわれず、豈に天に非ず耶、聖人の門に歸し、庶わくは罪悔無からんことを」とある。

史局 翰林院内にある歴史を編修する部署。周是修は衡府紀善に任命されていたが、衡王が年若く藩に赴いていなかっ

たため、周是修も共に京師に留まっていた。その後、洪武三十一年（一三九八）に洪武帝が崩じ、八月に『太祖實錄』編纂の命が下ると、周是修もまた翰林院にてその編纂に參與することになった。

同官 同一の官署に任職された人。同僚。ここでは周是修と共に『太祖實錄』の編纂に參與していた楊士奇・解縉・黃淮・胡靖・金幼孜・胡儼等を指す。

官 お上。

飼猪不暇看 看は、養う、見守る。この「看」字は、第三句の「官」（平聲寒韻）と韻を同じくしているため、「みる」（去聲翰韻）の意ではなく、「養う、見守る」（平聲寒韻）の意に解釋される。お上はブタを飼っていたが、（周是修は）みるひまがなかったの意。ここでは一匹のブタすら捨ておくことができない者に、自身の命を捨てられるはずがないとして、胡靖に國難に殉ずる意志のないことをいう。事は、『玉堂叢語』卷四、『明語林』卷一三などに見える。

一死一生交情見 生きるか死ぬかの時に、はじめて友情の厚薄があらわれる。前漢の翟公（文帝の時、廷尉と爲る）の故事をふまえる。『史記』卷一二〇・汲鄭列傳に、「始め翟公廷尉と爲り、賓客門に闔^みつ、廢せらるるに及び、門外は

雀羅を設く可し、翟公復た廷尉と爲り、賓客往かんと欲す、翟公乃ち大いに其の門に署して曰く、一死一生乃ち交情を知る、一貧一富乃ち交態を知る、一貴一賤交情乃ち見^{あら}わる」とある。

留與 とどめ與える。

若翁 お前の父親。ここでは周是修のこと。

作佳傳 佳傳は、その人の美事を述べ、功績を宣揚する傳記。

ここでは、楊士奇が周是修の傳を記したことをいう。

楊士奇自身はその經緯を、「是修卒年四十有九、時に解（縉）・胡（靖）・蕭（用道）・梁（潛）皆な諸^{これ}を文字に見^{あら}わす、然れども屬^{しよく}すること倉猝^{なり}にして、詳しきに及ばず、今没すること二十有八年矣、是修を知る者、獨り予在るのみ、毎に君子清白の節を追念す、文皇帝日月の明は、既に其の心を照らす、豈に當に遂に泯没を致すべけん耶^や、故に述べて小傳^{これ}を爲り、以て其の子^{えん}輅に授け、焉^{これ}を傳え使む」（『東里文集』卷二二）と述べる。

ただし、「佳傳を作る」という表現自体には、『晉書』卷八二・陳壽傳に「丁儀・丁廙 魏に盛名有り、壽其の子に謂いて曰く、千斛の米を覓^{もと}めて與^{あた}え見る可くんば、當に尊公の爲^{ため}に佳傳を作るべし」とあるのをふまえて、否定的

ニュアンスが込められている。尤侗もまた楊士奇を貶めて、「作佳傳」と言ったのである。

學宮に入つて、孔子像に別れを告げ、帶に詩を記して、自縊した。

史局を出て、同僚たちと別れ、

官ではちやうどブタを飼っていたが、（胡靖のように）面倒をみる暇がなかった。

生きるか死ぬかの段になって、友情の厚薄があらわれるものだ。

お前の父親に留め與えようと、立派な傳を書いた。

（松野 敏之）

22 兩狀元

詩題の「兩狀元」とは、二人の狀元（科擧の首席及第者）。建文帝に殉じた黃觀と、永樂帝を迎えた胡靖（胡廣）が、同じ狀元でありながら、その忠義と姦佞に天地ほどの隔たりがあることを、對比して歌っている。

黃觀（一三六四—一四〇二）、字は伯瀾、また尙賓。南直（南直隸・安徽）貴池の人で、洪武二十四年（一三九二）の狀元。

中國詩文論叢 第二十六集

建文帝の時、禮部侍中を拜し、方孝孺（18「十族刑」参照）と共に重用された。建文四年（一四〇二）、燕王が南下を開始すると、黄觀は建文帝の救命を奉じて各地で兵を募った。しかし、その募兵途中にあった安慶（南京上游の要地）において、京師陷落の報に接する。黄觀はその報せを聞いただけで、「吾が妻^{つま}翁志節有り、必ず辱められず」（『建文遜國臣記』卷三）と妻が節義に殉じたであろうことを想って痛哭した。事實、妻の翁氏は、象奴^{ぞうど}に與えられることを拒み、二人の娘と家族十餘人を従えて入水して果てたのである。黄觀自身は帝を助けるべく急ぎ京師に向かうが、李陽河（一名は東陽河、長江の支流で黄觀の郷里貴池に屬す、安慶府から六十里ほど下ったところ）まで戻ったところで、建文帝の遜位を知る。ここで意を決した黄觀は、朝服に着替えると東に向かって再拜し、急流中に身を投じて節義に殉じた。年三九。傳は『明史』卷一四三。

なお、宣德以後、郷里の貴地には黄觀の祠が建てられ、そこには「翁夫人血影石」なる石が傳わっていた。それは黄觀の妻翁氏が入水する際に血を吐いた石といわれるものであり、後には翁夫人の節義と共に、この血影石を歌う詩も多く作られた。事は、『明史』黄觀傳にも收められている。

いま一人の狀元である胡靖（一三七〇—一四一八）は、もとの名は胡廣。字は光大、江西吉水の人。建文二年（一四〇〇）、狀元に擧げられ、建文帝より「靖」の名を賜る。それは國難を靖んじて欲しいと願って與えられたものであった。しかし、金川門が陷落すると、胡靖は解縉等と共に燕王を迎え入れ、「靖」の名も棄てて「廣」に復名した。これ以後は、永樂帝の北征に従軍して記録をとったり、あるいは左春坊大學士を兼ねて、『五經大全』『四書大全』『性理大全』の編纂を掌った。永樂一四年（一四一六）、官は文淵閣大學士に至る。傳は『明史』卷一四七。

「尤珍注」

觀兵を上江に募る、變を聞き、大いに哭す、人に謂いて曰く、吾が妻翁氏志節有り、必ず死せん矣と、魂を招いて之を葬る、明日家人至りて云う、夫人象奴^{ぞうど}に給配せられ、釵釧^{さいせん}を持し、佯りて出でて酒肴^{いっわ}を市^かわ令む、急に二女^{にわか}を攜え、家屬十餘人と共に、淮清橋の下に投じて死せり矣と、觀復た哭す、東陽河に至る、朝服し、東に向かいて再拜し、羅刹磯の湍流の中に投ず、

〔資料〕

『明史』卷一四三・黃觀傳、同卷一四七・胡廣傳、『明史紀事本末』卷一八・壬午殉難、^明黃佐『革除遺事』卷四・黃觀傳、^明鄭曉『建文遜國臣記』卷三・黃觀傳、^明尹直『侍中黃公言行錄』（^明徐紘『明名臣琬琰錄』卷二所收）、^明李贄『續藏書』卷五・黃觀傳、^清傅維麟『明書』卷一〇四・黃觀傳

兩狀元

宋有兩狀元

宋に兩狀元有り

夢炎與文山

夢炎と文山と

明有兩狀元

明に兩狀元有り

胡靖與黃觀

胡靖と黃觀と

科第同一時

科第 同一一時

忠姦天壤間

忠姦 天壤の間

偉哉侍中眞丈夫

偉なる哉 侍中は眞の丈夫

夫人烈女世亦無

夫人は烈女 世に亦た無し 「ずるも

寧甘舉室埋魚腹

寧ろ室を舉げて魚腹に埋めらるるに甘ん

不忍將身配象奴

身を將て象奴に配せらるるに忍びず」

狀元 會試の首席及第者。科舉における最終試験^{でんし}殿試で、第

尤侗『擬明史樂府』譯注（六）（福本・尤侗研究会）

一位合格者を狀元、同第二位を榜眼^{ぼうえん}、同第三位を探花^{たんか}と呼ぶ。

夢炎 ^{りゅうほうえん}留夢炎、字は漢輔、號は忠齋。浙江衢州の人で、理宗の淳祐五年（一二四五）の狀元。左丞相に任じられたが、元軍が臨安に迫ると、官を棄てて降伏した。後、元に二十年仕え、禮部尚書、翰林學士承旨を歴任した。傳は『宋史新編』卷一八九。

文山 文天祥（一二三六—一二八三）、字は履善、號は文山。

江西廬陵の人で、理宗の寶祐四年（一二五六）の狀元。徳祐元年（一二七五）元軍の侵攻に抵抗したが、あえなく捕えられた。大都で三年間監禁され、服従を強要されたが、死を誓って屈せず、大義に殉じた。著書に『文文山先生全集』があり、「正氣歌」で有名。傳は『宋史』卷四一八。

胡靖 胡廣のこと。「靖」は狀元に挙げられた際に、建文帝から賜った名。解題參照。

科第 科舉及第をいう。第は、成績の序列の意。

侍中 官名。建文帝の時、六部にはそれぞれ尚書・侍中・侍郎が置かれたが、永樂帝によって侍中は廢止された。『明史』卷七二・職官志一參照。ここでは禮部侍中であつた黃觀を指す。

中國詩文論叢 第二十六集

舉室 一家を舉げて。

丈夫 心身ともに人並み優れた立派な男。ますらお。

埋魚腹 水中に溺死することをいう。『楚辭』漁父に、「寧ろ

湘流に赴きて、江魚の腹中に葬らるるとも、安く^{いず}んぞ能く
皓皓の白きを以てして、世俗の塵埃を蒙らん乎^や」とあるの
にもとづく。

配 めあわせる。

象奴 象を飼育する奴隷。當時、象は東南アジア各國から貢
獻され、儀式に用いられた。そのため、宮中では常に象が
飼育されており、その世話をする象奴が必要とされた。

『明史』卷七六・職官志・錦衣に、「馴^{しんぞう}象所は、象奴・養
象を領し、以て朝會の陳列・駕輦・馱寶の事に供す」とあ
る。なお、『明史紀事本末』に依れば、黃觀の妻以外にも、
同じく建文帝に殉じた侯泰の妻も象奴に配されている。

宋代には、二人の狀元がいた、
留夢炎と文文山と。

明代にも、二人の狀元がいた、
胡靖と黃觀と。

科擧及第は、同じ時代であったが、

忠義と姦佞には、天と地ほどの隔たりがある。
立派なことである、黃侍中は眞のますらお、
翁夫人も世にも稀なる烈女。

むしろ一家を擧げて、魚の餌食となろうとも、
その身を象奴の妻に落とされるには忍びない。

(松野 敏之)

23 一郡守

靖難の殉臣、姚^{ようぜん}善を歌う。詩題の一郡守は、一介の地方長
官のこと。蘇州知府であった姚善をいう。

姚善(一三六〇—一四〇二)、字は克一、湖廣(湖北)安陸
の人。洪武年間(一三六八—一三九八)の擧人。祁門縣丞・廬
州同知・重慶同知等を歴任し、洪武三〇年(一三九七)、蘇州
知府に任命された。靖難の變が起ると、あらかじめ鎮江・
常州・嘉興・松江の四郡守と結び、民兵を訓練して勤王の誓
いを立てた。建文四年(一四〇二)、蘇州を含む五郡の兵を統
率する敕命を受けたが、募兵中に京師が陷落してしまう。難
を逃れた黃子澄が、蘇州にやって来て共に再起をはかろうと
誘うが、姚善は「公は去る可し、善は去る可からず、公は朝
臣、四^よに往きて號召し興復を圖る可し、善が職は守土、義

當に城と存亡すべし」(『建文遜國臣記』卷五) と言ってこれを斷った。知府として燕王に徹底抗戦する姿勢をとった姚善であったが、ほどなくして直屬の部下許千戸(千戸は官名)によって捕らえられてしまふ。燕王は「若は一郡守なり、乃ち敢て舉兵し我に抗う邪」(同上)と詰問するも、姚善は最後まで節を曲げず、刑死した。建文四年七月一日、年四三。傳は『明史』卷一四二、『建文遜國臣記』卷五など。

姚善の友人黃鉞(こうえつ) (?—一四〇三) は、字は叔揚、南直(江蘇)常熟の人。建文二年(一四〇〇)の進士。京師が陥落した時には郷里にて父の喪に服していた。共に建文帝のために身を捧げようと誓いあった黃鉞は、姚善刑死の報せを聞くと、琴川橋に赴き、かつての誓いに従って入水し義に殉じた。傳は、『明史』卷一四三、『建文遜國臣記』卷五など。

當時、燕王の兵が姚善に連なる者を捕らえまわっていたため、黃鉞の家族はただ恐れおののくだけでその亡骸を探し求めることはなかった。それに對して、同門の楊福は日夜、橋の傍らで哭し、黃鉞の亡骸を探し求めたのである。數日の後、黃鉞の亡骸が突如として水中より浮かび上がってきた。楊福は友人の遺體を抱いて慟哭し、禮を盡して埋葬したという。黃鉞の傳は、『明史』卷一四三、『建文遜國臣記』卷五など。

尤侗『擬明史樂府』譯注(六)(福本・尤侗研究会)

「尤珍注」

蘇州知府姚善 五郡に約して勤王せんとす、黃子澄 至り、共に海に航せんと謀る、善曰く、公は朝臣、四に出でて號召す可し、善は守土、當に城と存亡すべしと、後、許千戸に縛し獻ぜ爲る、文皇(燕王)曰く、若は一郡守なり、乃ち敢て舉兵し我に抗うと、善 屈せず、之を磔す、給事黃鉞 方孝孺の書を以て善に致し、國に(身を)許すを相い期す、善死す、鉞 琴川橋に登り、哭して之を祭り、奮身入水して死す、友人楊福 日夜 橋の側に泣く、數日にして尸忽ち自ら水中より出立す、王賓・韓奕は、吳門の高隱、皆な善の禮する所の士也、

「資料」

『明史』卷一四二・姚善傳、同卷一四三・黃鉞傳、『明史紀事本末』卷一八・壬午殉難、明黃佐『革除遺事』卷四・姚善傳、明鄭曉『建文遜國臣記』卷五・姚善傳、同卷五・黃鉞傳、明焦竑『國朝獻徵錄』卷八三・姚善傳、同卷八〇・黃鉞傳、清錢謙益『列朝詩集小傳』甲集・王賓傳、同甲集・韓奕傳

一郡守

中國詩文論叢 第二十六集

一郡守 敢舉兵 一郡の守 敢て舉兵す

誰共事 黃太卿 誰か事を共にせん 黃太卿」

公朝臣 可四出 公は朝臣 四に出づ可し

善土臣 守吾職 善は土臣 吾が職を守らん

給事來 同戮力 給事來たり 同に力を戮せ

誓捐軀 報希直 軀を捐て希直に報せんと誓う」

君不見 君見ずや

楊生慟哭琴川水 楊生慟哭す 琴川水

黃公沈屍忽自起 黃公の沈屍 忽ち自ら起つ

王賓韓奕兩山人 王賓 韓奕 兩山人

何不夷門送公子 何ぞ夷門に公子を送らざる」

郡守 もと邊境の郡を守る武官職。秦漢以降は地方長官のこ

とをいう。ここでは、蘇州知府であつた姚善をさす。

黃太卿 太卿、即ち太常寺卿に任ぜられた黃子澄のこと。太常寺は祭祀禮樂の事を掌り、卿はその長官（正三品）。『明史』卷七四・職官志三參照。

黃子澄（一三五〇—一四〇二）、江西分宜の人。名は湜、字の子澄で知られた。洪武一八年（二三八五）の狀元。翰林院編修・同修撰・太常寺卿を歴任した。建文帝が即位す

ると、翰林學士を兼任して齊泰（？—一四〇二）と共に國政に參與。彼等が定めた削藩政策が、結果的に「靖難の變」を引き起こした。京師陷落の後、再起を圖ろうとしていたが、燕王に捕えられ、磔にされる。この間の經緯を、『明史』本傳は、「（子澄は）善と海に航し兵を乞わんと欲す、善可かず、乃ち嘉興の楊任に就て事を舉げんと謀るも、人に告げ爲れ、俱に執え被る」とまとめる。傳は『明史』卷一四一、萬斯同『明史』卷一八三など。

朝臣 朝廷で要職にある臣下、中央官。ここでは、黃子澄をいう。

四出 四方へ出向くこと。『宋史』卷一九四・兵志八に、「京師の兵既に少し、必ず須らく使者をして四に出で、大いに召募を加え使むべし」とある。

土臣 天子のために土地を守る臣下、地方官。ここでは、「守土臣」を「土臣」と表現して「朝臣」と對比させた。

蘇州知府であつた姚善をいう。

給事 官名。給事中をいう。ここでは、刑科給事中であつた黃鉞をさす。黃鉞は、方孝孺から京師を補佐し得る郡守について問われた際、蘇州知府である姚善を薦め、方孝孺の書狀を姚善に届けた。その書には、「勉むるに忠孝を以て

し、力を王室に戮せ、時艱を濟わんと期す」とあり、これを読んで姚善・黃鉞の二人は慟哭し、ともに國に殉じることを誓いあった。京師陷落の後、姚善刑死の報せに接した黃鉞は、「吾君とともに國恩を受く、國に難有り、義同に身を許す、今君希直（方孝儒）とともに死す、吾義に背き獨り生くるに忍びん乎」（『明史紀事本末』卷一八）と言って入水したという。

戮力 力を合わせる。一致協力する。『左傳』昭二五に、「力を戮せ心を壹にし、好惡之を同じうす」とある。

希直 方孝儒の字。方孝儒は、18「十族刑」参照。

楊生 楊福のこと。生は男子に對する稱。楊福と黃鉞は、共に楊潑（楊福の父）について學んだ同門の徒であり、楊福もまた「古行有り」と評される。傳は、『國朝獻徵錄』卷八〇・黃鉞傳附。

琴川 また琴水ともいう。黃鉞の郷里常熟を流れる川。常熟の西北虞山を源とし、東に流れて常熟に至り、元和塘に抜ける。

王賓 字は仲光、南直（江蘇）長洲の人。經籍に通じ、特に醫術に秀でていた。終身妻を娶らずに母に孝行を盡くしたことも知られる。姚善は、陋巷に住んでいた王賓のもと

を、禮を盡くして訪問し親交を結んだ。傳は『列朝詩集小傳』甲集。

韓奕 字は公望、南直（江蘇）吳縣の人。理學に専心し、醫術に優れる。當時、吳地方の人びとは王賓と韓奕を高潔な隱士として並稱していた。『明史』姚善傳には、「（善は）好く節を折りて士に下り、隱士王賓・韓奕・俞貞木・錢芹の輩を敬禮す」とあり、韓奕等隱士達が姚善に厚遇を受けたことが見える。著書に『韓山人集』がある。傳は『列朝詩集小傳』甲集。

山人 世をすてて山中に住む隱士をいう。明末には、醫術や占卜を生業としたり、あるいは朝廷の官吏・宦官等と結んで流言を廣めたりするいかかわしい人びとも見られていた。尤伺もまたいかかわしさをこめて王賓・韓奕のことを「山人」と呼ぶ。山人については、『萬曆野獲編』卷二三・山人、同補遺卷三・刑部・山人蜚語、金文京「中國近世における知識人の性格——明代の山人を手がかりとして」（『中國史學』七卷、一九九八年一月）、同「明代萬曆年間の山人の活動」（『東洋史研究』第六一卷第二號、二〇〇二年九月）等参照。

夷門送公子 夷門は、戰國魏の都城大梁（河南開封）の東門。

中國詩文論叢 第二十六集

魏の公子信陵君と魏の隠士侯嬴こうえいの故事をふまえる。夷門の門番であつた侯嬴とその友人朱亥しゅがいは、信陵君みづからが出迎えるという厚遇を受けていた。秦が趙を攻めた際、信陵君は死を賭して趙を救おうとしていた。そこで、朱亥は從軍して信陵君のために働き、侯嬴は老齡のため從軍できないので、夷門で信陵君に良策を伝え、更にはなむけとしてみづからの首を刎ねた。事は、『史記』卷七七・魏公子列傳に詳しい。本詩では、姚善に厚遇された王賓・韓奕が、侯嬴・朱亥のようにその恩に報いなかったことを非難する。

一郡の守たる姚善は、敢えて舉兵した、

誰が協力するの、か、黃太卿。

公あなたは中央官、四方へ赴くべきだ、
善わたしは地方官、自分の職を守ろう。

給事黃鉞が來て、共に力を合わせ、

身を捨てて、方希直に報いようと誓う。
ごらん。楊福が琴川で慟哭すると、

黃鉞の沈んでいた屍が、ふいに浮きあがってきた。

王賓・韓奕の二人の山人は、

どうして夷門で、公子を見送らなかったのか。

24 閤門使

(松野敏之)

靖難の殉臣、劉璟けいを歌う。詩題の閤門使かうもんしは官名。旨命をうけて、乘輿・朝會・遊宴などに供奉し、失態を犯した者を糾弾することを掌る。ここでは閤門使であつた劉璟をいう。

劉璟(？―一四〇二)、字は仲璟、浙江青田の人、開國の功臣劉基(5)「青田行」参照)の次男。軍略に優れ、溫州で叛亂が起つた際には、その獻策によって賊を破っている。洪武二三年(一三九〇)、帝は父の爵位を嗣がせようとしたが、劉璟は甥の劉薦(長兄璉の子)を勧めて辭退した。これを喜んだ帝は、爵位は劉薦に嗣がせ、劉璟を閤門使に任命。鐵簡を授けて奸佞な輩を取り締まらせたといい。劉璟は職務を忠實に全うして嚴格に法を適用したため、朝廷から畏れられることになる。たまたま洪武帝が年若い谷王の輔佐役の人選に悩んでいたの、大臣達は「閤門使劉璟、忠勇果敢、任ず可し」(『建文遜國臣記』卷五)と進言し、彼等にとって厄介な閤門使劉璟を推薦した。これにより、洪武二十四年(一三九二)八月、劉璟は谷王府左長史に轉任。さらに、谷王や燕王を含む六人の王のことを併せて取り仕切るように任されたという。

ある日、王命により劉璟が燕王府に赴いた折りに、燕王と圍碁を打ったことがあった。劉璟が勝ちをおさめ、燕王が「少しは譲る氣はないのか」と言ったところ、劉璟は「譲る可き處は、璟敢て譲らざんばあらず、譲る可からざる處は、璟敢て譲らざる也」（同上）と應えたという。劉璟の剛直さを示す話柄であり、劉璟の各傳に見える。

靖難の變が起ると、劉璟は谷王に随って京師に入った。李景隆に従って前線へ赴いたが、度々の獻策は聞き入れられることなく敗走し、建文三年（一四〇一）やむなく歸郷した。燕王が京師を陥し、永樂帝として即位すると、帝は劉璟との接見を望んだ。しかし劉璟の方は永樂帝のことを「殿下」と稱して、皇帝に對する禮をとらず、その上「殿下は百世の後、一箇の字（篡）を逃れ得ず」（同上）と非難した。これによって、劉璟は詔獄に繋がることになったが、最後まで燕王を拒み、獄中に自經して節義に殉じた。著書に『易齋集』二卷がある。傳は『明史』卷一二八、『建文遜國臣記』卷五など。

〔尤珍注〕

劉璟 閤門使た爲り、太祖 鐵簡を賜い、不職なる者（任に堪えない者）を糾たださ令む、既に谷王の長史を授けられ、兼ねて

尤侗『擬明史樂府』譯注（六）（福本・尤侗研究会）

肅・遼・度・寧・燕・趙六王の事を提調す、嘗て燕に至り王と奔え（圍碁）す、璟勝つ、王曰く、公少しも我に譲らざる耶と、璟色を正して曰く、譲る可きは則ち譲るも、譲る可からざるは、璟敢て譲らざる也と、革命の日、逮とどえられ至り、上に見ゆるも猶お殿下と稱す、且つ曰く、殿下百世の後、一个の字（篡）を逃れ得ずと、

〔資料〕

『明史』卷一二八・劉璟傳、『明史紀事本末』卷一八・壬午殉難、鄭曉『建文遜國臣記』卷五・劉璟傳、『國朝獻徵錄』卷一〇五・劉璟傳、明李贄『續藏書』卷七・劉璟傳、清查繼佐『罪惟錄』卷八中・劉璟傳、明沈德潛『萬曆野獲編』卷五・劉璟鐵簡、明王世貞『弇山堂別集』卷二一・史乘考誤二、清錢謙益『列朝詩集小傳』甲集・劉基附

閤門使

閤門使

閤門使

鐵簡賜

鐵簡の賜

谷長史

谷長史

兼理六王事

兼ねて理む 六王の事

中國詩文論叢 第二十六集

當局不敢讓

局に當りて 敢て譲らず

臣義應如是

臣の義 應に是の如かるべし

殿下百世後

殿下 百世の後

難逃一个字

一個の字を逃れ難し

下詔獄 徽髮死

詔獄に下され 徽髮して死す

嗟乎此眞文成子

嗟乎 此れ眞に文成の子なり

張辟疆 豚犬耳

張辟疆は 豚犬耳

閤門使

ここでは劉璟のことを指す。劉璟が閤門使の任にあつ

たのは、洪武三年（一三九〇）より、翌一四年八月まで。

その在任中には、法令に嚴格なことで名を知られた袁泰（？一

一三九二）までも糾し、朝廷で畏れられたと伝えられる

（『明史』卷二二八、『國朝獻徵錄』卷一〇五など）。

鐵簡

鐵製の簡。簡は笏狀の道具。洪武帝より閤門使として、

奸臣を取り締まるために賜わったといわれる。『國朝獻徵

錄』卷一〇五には、「環殿に當たり、簡を以て其の項を撃

つ」とある。また、その賜った鐵簡には、「除奸摘佞」（奸

を除き佞を摘む）の四字が金字で書かれていた（『建文遜國臣

記』卷一、『續藏書』卷七、『萬曆野獲編』卷五など）。

谷長史 谷王府の長史。長史は官名。王府長史司長官、左右

一人づつ置かれ、劉璟は左長史であった。洪武三年（二三

七〇）に參軍府參軍として設けられ、一四年には正五品に

品秩を上げている。中央との連絡・奏上や王府の政令・庶

務を掌り、諸王を輔弼した。『明史』卷七一・職官志參照。

谷王は、すなわち朱穗（一三七九—一四二八）。洪武帝の

第一九子。洪武二四年（一三九一）に谷王に封ぜられ、二

八年、實際に宣府に赴任した。靖難の變に際しては、京師

に赴いて防衛にあたったが、結局金川門を開いて燕王を迎

え入れた。この功により燕王の即位後は、長沙王に改封さ

れたが、驕慢な振る舞いが目立ったため、永樂一五年（一

四二七）、庶人に落とされ、王府は削藩された。

六王

肅王朱模・遼王朱植・慶王朱橚（尤珍注は「度（王）」

に誤る）・寧王朱權・燕王朱棣（後の永樂帝）・趙王朱杞の

六人の王。特に、天逝した趙王以外の五王は塞王と呼ばれ、

強大な軍事權を有し、モンゴルの侵攻に備えていた。

當局

碁をうつ。局は、棋局。碁盤のこと。當時の難局面を

兼ねていう。

一个字

一字。ここでは燕王の篡奪を非難する「篡」字をい

う。

詔獄

天子の特別法廷。錦衣衛の獄とも言われる。錦衣衛は、

正規の機関である三法司（都察院・刑部・大理寺）の権限外にある皇帝直屬の特務機関で、監察と刑獄を掌った。その取り調べは苛烈を極め、生きて釋放されることは無いとまで言われた。洪武二〇年（一三八七）、詔獄は一時的に廢されたが、永樂帝の時に復活し、北鎮撫司が治めた。『明史』卷九三・刑法志に、「或いは本より死の理無し、而れども片紙もて詔獄に付せば、禍を爲すこと尤も烈し」とある。**徽髮死** 徽は繩をなうこと。ここでは自分の髪を編んで、縊れて死ぬこと。劉璟の最期に關しては、「辮髮して自經す」と記す資料（『國朝獻徵錄』卷一〇五、『續藏書』卷七など）や、「獄中に縊死す」と記す資料（『萬曆野獲編』卷五）もある。

文成 劉基の諡。劉璟の父で、開國の功臣。優れた軍略家でもあったことから、漢の高祖劉邦を助けた張良になぞらえられる（5「青田行」参照）。

劉璟が閤門使に任命される以前、温州の賊葉丁香が叛亂を起こした。その際、延安侯唐勝宗は劉璟の獻策を用いてこれを討伐し、洪武帝は、「璟は眞に伯溫（劉基）の兒矣」（『明史』本傳、『建文遜國臣記』卷五など）と言って稱賛した。

張辟疆 前漢の功臣張良の子、沛郡城父の人。惠帝が崩じた

尤侗『擬明史樂府』譯注（六）（福本・尤侗研究会）

時（前一八八）に侍中となり、劉氏に忠節を盡くさず、呂氏に加擔した。呂太后を安心させるために、張辟疆は呂氏一族の拔擢を進言。これがいわゆる「呂氏の亂」の發端となり、時政を亂した。

豚犬 ブタと犬。出來の悪い子をいう。『三國志』卷四七・吳主傳に引く胡冲^晉『吳歷』に、「公（曹操）は舟船・器仗・軍伍の整肅なるを見て、喟然として歎じて曰く、子を生みては當に孫仲謀（吳主孫權）の如かるべし、劉景升（劉表）の兒子は豚犬の若き耳と」とある。

閤門使として、鐵簡を賜り、

谷王府の長史として、六王の事も併せて取り仕切った。

圍碁を打つても、決して讓歩しない、

臣の義は、このようにあるべきだ。

殿下は、百世の後まで、

寡の一字から逃れることはできない。

詔獄に下され、髪を編み縊れて死んだ。

ああ、まことに劉文成の子である。

張辟疆などは、豚犬にすぎない。

（松野 敏之）